

「故郷を離れる心境について」(抜粋) 多田香代

昭和初期、子ども時代の常呂浜の記憶

常呂町高齢者教室『昭和63年度才ホーツク大学文集トーコロ』掲載

(略) 私は大正9年7月13日、二男三女の末子に生まれました。生まれた時は、現在の本通りで「金の湯」という風呂屋をしております。幸せな幼年時代でした。

私の思い出は常呂の海です。1月末頃になると、あの大海原も一面真っ白い氷に閉ざされて、春は4月頃には氷も去り、船がチラホラと見えて浜も活気づいてきます。ニシン、また毛ガニが捕れ始めます。海岸には毛ガニが泳いでいるのが見えます。それを大きな力ごと天秤棒を担いで、針金を熊手のように作ってカニをたくさん捕ってきました。

私が11才の頃、網走市会議員をしております宮津旬太郎さんにお祭りに遊びに来なさいと言われましたので、初めて親から離れて遊びに行きました。当時は汽車もなく、発動汽船で網走へ出たのもとても楽しかった思い出があります。2、3日泊まって帰る時は、上杉さんでトラック運送をしておりましたので、それに乗せてもらって帰って来ました。網走坂まで来たら、毎日真っ黒になるまで浜で泳いでおりましたので、浜の方を見るとお友だちが泳いでいる姿が見え、早くそこへ行きたくて胸が踊りました。その時、チューインガムが常呂になかったので、おみやげに買ってきたのをあげました。(略)

*注:「常呂町史」には、「昭和6年には、上杉商店、久世信一らもトラックを移入、

物資の輸送開始」の記載